

ベルに関わるもろもろのことをわかってもらう必要がある。さて、巷間よく語られる「ライトノベル的」な特徴を拾ってくると、例として以下のようになる。

- ① 重厚なストーリーやよく練りこまれた世界設定よりも、まず魅力的なキャラクターが前面に立ってくる小説。
- ② ターゲット読者と年齢や性別などの点で共通項の多いキャラクターが主人公を務め、共感を誘う小説。
- ③ 漫画やアニメ的なイラストが、表紙はもちろん、本文中にも挿絵という形でふんだんに盛り込まれている小説。
- ④ 読みやすい工夫（一文が短い。改行が多い。会話文が多い代わりに地の文は少ない。フォントの拡大など目を引く工夫がされている。など）が凝らされた小説。
- ⑤ 学園青春、中世ヨーロッパ風ファンタジー、近未来SFアクションなどなど、「面白ければなんでもあり」というスタイルの小説。

これらはライトノベルの各側面を的確に捉えてはいるが、それが全てか、というところではない。ライトノベルにはある種の傾向がありつつ、しかし多様な方向性をその中に内包した作品ジャンルなのだ。

まず①、「キャラクター重視」という点について。たしかに、ライトノベルは時に「キャラクター小説」ともいわれるくらいにキャラクターが重視される。主人公の少年の周囲を個性的な女の子たちが取り囲んでドタバタする——という、いわゆる「ハーレムもの」が多いのも、その印象を強化している（ちなみに、中心に立つのが少女になり、取り囲むのがイケメンに変わると「逆ハーレム」と呼ばれる）。

そのキャラクターたちの個性は、俗に「属性」と呼ばれる捉え方で把握される。これは「強気」「クール」「天然」「ツンデレ（普段はツンツン、特定の状況ではデレデレ、とギャップのある様子）」「ヤンデレ（デレデレの側面とヤン病んでる側面を併せ持つ）」「腹黒」などの性格面、あるいは「ツインテール」「眼鏡」などのファッション面、「委員長」「アイドル」のような立ち位置面など、多岐にわたるものだ。ただ、この属性という考え方はライトノベルに顕著というより、アニメや漫画、ゲームなどの各種フィクションに共通の概念と考えるべきだろう。

このように、キャラクターの個性に注目するのはそもそもごく当たり前の考え方であり、古典的名作だってそのような見方で解釈することは不可能ではない。たとえば『源氏物語』は美形貴族を主人公にしたハーレム小説である」という具合だ。